

様 式 C - 1 9、F - 1 9 - 1、Z - 1 9 ( 共通 )

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書



令和 6 年 5 月 3 日現在

機関番号：22604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00418

研究課題名(和文) バンド・デシネとアダプテーションの理論に関する研究

研究課題名(英文) Research on French comics and adaptation

研究代表者

古永 真一 (FURUNAGA, Shinichi)

東京都立大学・人文科学研究科・准教授

研究者番号：00706765

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000 円

研究成果の概要(和文)：バンド・デシネと呼ばれるフランス語圏のマンガに関する理論的な成果の調査、とりわけアダプテーションと呼ばれる異なるメディアにまたがるマンガ表現に関する研究に着目し、必要な文献の入手に努めた。フランス語、英語、日本語の文献を入手し、優先順位をつけたうえで精読に努めた。バンド・デシネに顕著な、日本のマンガとは異なるフォーマット(ハードカバー、フルカラー、50頁以下のページ数)が「伝統」として創られてゆく過程を実証的な観点から考察し、「バンド・デシネのアルバムの規範化をめぐる問題」というタイトルで寄稿した(小山昌宏・玉川博章・小池隆太編『マンガ探求13講』、水声社、2022年)。

研究成果の学術的意義や社会的意義

バンド・デシネと呼ばれるフランス語圏のマンガに関わるアダプテーションの研究を通じて、マンガというメディアの特徴や多彩な表現、さらにはこうした特性を活かした前衛的な表現の探求、マンガ表現に関する文化的な差異やフランスの読者や出版の制度の問題について考察を深めることが可能となった。日本のマンガが世界で評価されていることを喜ぶだけでなく、ヨーロッパ各国やカナダやアフリカまでまたがるフランス語圏のマンガの傑作やマンガ文化について知ることは、マンガ学やフランス文学の研究において、今後ますます重要かと思われる。

研究成果の概要(英文)：I focused on investigating the theoretical results regarding French-speaking manga known as bande dessinée, and in particular on the study of manga expression across different media known as adaptation, and endeavored to obtain the necessary literature. I obtained documents in French, English, and Japanese and read them carefully. Examining from an empirical perspective the process by which a format different from Japanese manga (hard cover, full color, page count of 50 pages or less), which is notable for bande dessinée, was created as a "tradition" and how it will be digitized in the future. In addition to predicting the trend of bande dessinée albums, I wrote a contribution titled "Problems surrounding the standardization of bande dessinée albums" (Masahiro Koyama, Hiroaki Tamagawa, and Ryuta Koike, 13 Lectures on Manga Research, Suiseisha, 2022).

研究分野：表象文化論

キーワード：バンド・デシネ

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

### 1. 研究開始当初の背景

2017 年度 基盤研究(C)の研究計画「バンド・デシネ理論の多様な変遷に関する研究」が採択される機会に恵まれ、バンド・デシネに関する理論や批評について、仏語のみならず英語文献においても知見を深めることができた。この研究では、マンガ理論の対象を日本のマンガに限定せず海外の作品も含めた視野にたつために、本研究では主としてバンド・デシネと呼ばれるフランスを発信地や中継地とするフランス語圏のマンガやそれらに関わる理論的言説を基本的なコーパスとしつつ、日本のマンガ理論についても調査を続けた。具体的には、ホロコーストについて描いたマンガと論文について調査し、これまでのホロコーストに関するマンガがいかなるものであったのか、それがどのような経緯をたどって新たな潮流を生み出しているのかを調べることで、マンガ理論の潮流を掘り下げた。またそのような作品が誘発した議論や、歴史の記憶や証言や表象不可能性に関する哲学や美学の論考も参照し、ホロコーストに関するマンガの理解にどのような影響をもたらすのかを検討した。結果として、単にホロコーストを描く作者の倫理や歴史観だけでなく、その表現技法がもたらす問題、とりわけ写實的に描くことの意味と問題点が浮き彫りとなった。

その研究成果を足がかりとして、本研究ではアダプテーションというテーマから、映画や文学など他の表現も視野に入れつつ、バンド・デシネというメディアの特異性や芸術性に関する研究を深めたいと考えたのが、研究開始当初の背景である。というのも、アダプテーション研究は国内外でいまかなりの蓄積があり、各メディアのアダプテーションが多数制作される現代において、すぐれてアクチュアルな問題を含んでおり、バンド・デシネ研究でも益するものが多いと考えたからである。映画研究やナラトロジー、社会学といった分野におけるさまざまな知的成果は、アダプテーションという問題意識をもつことによって、バンド・デシネの研究にも活かされられると思われる。日本のマンガ研究においては自明のことかもしれないが、日本におけるバンド・デシネ研究においてはまだその重要性が必ずしも十分には認知されていないと思われる。

### 2. 研究の目的

映画のマンガ化やマンガの映画化といったさまざまなアダプテーションは、日本のみならずフランス語圏のバンド・デシネの世界でも顕著にみられる現象である。日本のマンガがフランスで映画化されるケースなど、そのバリエーションはさまざまである。いわばアダプテーション産業という市場で発表される作品群には、バンド・デシネのメディアについて考えるうえで大変参考になる事例も含まれている。日本ではあまり知られていないフランス語圏のマンガに関するアダプテーションを研究テーマとして取り上げることで、世界マンガのそれ以外の二大勢力(日本とアメリカ)のコミックス文化の研究にも貢献できるような視点をもちうると考えて本研究を思い立った次第である。

また、アダプテーション研究においては、デジタル化の波も看過することはできないと考えた。例えば、バンド・デシネでも、ウェブサイト上に発表され、一部をクリックするとキャラクターが動きだしたり、音が出たり、画面が変化するような作品が製作されている。現段階では、マンガにアニメーションやゲームの要素が加わった中途半端な作品がほとんどではあるが、今後、このようなデジタル・マンガからマンガ史に残る傑作が生まれてくる可能性は否定できない。現にフランスではそのようなデジタル・マンガの可能性を主張する論文も書かれている。また、日常生活のレベルでも、電車などで、スマートフォンで読みやすい縦スクロールのマンガを読む人をみかけることは珍しくなくなった。他方、アニメーションでは、マンガ原作とは異なるアニメーションならではの持ち味を発揮した作品も少なくない。最新のCGなどの技術を駆使したアクションシーン、ネット配信のドラマならではの長尺の条件を活かした心理や記憶の描写などが一例である。以前、文化庁のメディア芸術祭が開催されていたとき、マンガ部門の審査委員を担当した関係からさまざまな応募作品を読む機会に恵まれたが、そこには、アニメーションに限りなく近いマンガ作品の投稿もみられ、そのような前衛的で意欲的な作品に触れるにつけ、あらためて各メディアに峻別できない曖昧な領域のもつ潜在的な可能性についても考えさせられた。そうした経験も本研究においてアダプテーションというテーマを掲げた背景となっている。

### 3. 研究の方法

バンド・デシネと呼ばれるフランス語圏のマンガに関する理論的な成果の調査、とりわけアダプテーションと呼ばれる異なるメディアにまたがるマンガ表現に関する研究に着目し、必要な文献の入手に努めた。フランス語、英語、日本語の文献を入手し、優先順位をつけたうえで精読に努めた。また、DVDやBlu-rayなどの映像資料やウェブサイトで公表されている記事や論文を読みこんだ。バンド・デシネがかつて誇った雑誌文化、日本のマンガと比べると独特なハードカバーの本の文化の歴史を考察するために、雑誌やアルバムだけでなく、関連する研究書も取り寄せて読むようにした。それによって、バンド・デシネという表現が雑誌や単行本、あるいはそれ以外のメディアにおいて持ち味を発揮する、あるいは発揮しづらいケースについて考える機会をもてるようにした。

#### 4．研究成果

バンド・デシネに顕著な、日本のマンガとは異なるフォーマット(ハードカバー、フルカラー、50頁以下のページ数)が「伝統」として創られてゆく過程を実証的な観点から考察し、「バンド・デシネのアルバムの規範化をめぐる問題」というタイトルで寄稿した(小山昌宏・玉川博章・小池隆太編『マンガ探求 13 講』、水声社、2022 年)。

さらには、勤務校のオープン・ユニバーシティの夏期講座でマンガ・アニメをテーマとする講座に講師として参加し、バンド・デシネの文化や注目すべき現代の作品のいくつかを取り上げて解説をした。この講座は 2024 年度も継続し、それとは別に勤務校の別のオープン・ユニバーシティの講座も担当することになっており、「マンガ研究の世界」と銘打ち、日本語で書かれたマンガの研究書について解説する講座において計 4 回の講義を担当する予定である。そこでも、海外コミックの研究の動向を取り上げる予定であり、バンド・デシネの独特な文化について解説することになっている。こうした形で本研究の成果を、大学生のみならず、オープン・ユニバーシティのように高校生から社会人まで参加する講座において、フィードバックしていく所存である。

本研究によって、バンド・デシネと呼ばれるフランス語圏のマンガに関わるアダプテーションの研究を通じて、マンガというメディアの特徴や多彩な表現、さらにはこうした特性を活かした前衛的な表現の探求、マンガ表現に関する文化的な差異やフランスの読者や出版の制度の問題について考察を深めることが可能となった。日本のマンガが世界で評価されていることを喜ぶだけでなく、ヨーロッパ各国やカナダやアフリカまでまたがるフランス語圏のマンガの傑作やマンガ文化について知ることは、マンガ学やフランス文学の研究において、今後ますます重要かと思われる。

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6 . 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7 . 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------